

A21 講義室 【その他】

① ARELE は英語教育にどのように貢献しているのか—過去 10 年間のレビュー—

宮迫 靖静 (福岡教育大学)

区分:自由研究

対象:一般

ARELE が英語教育にどのように貢献しているのか探るために、過去 10 年間の論文(n = 183)を対象に、掲載数、研究テーマ、研究方法、研究場面等の推移を調査した。その結果は、(a)論文数はコロナ禍 1 年目まで減少し、その後は横ばいである、(b)実践論文の割合に大きな変化はない、(c)テーマ数は、reading を筆頭に、teaching methodology、vocabulary、grammar 等が続いている、(d)方法と場面は圧倒的に量的研究と大学が多い、等であった。

② 下からの変革—新英研とトランスランゲージング教育—

戸出 朋子 (広島修道大学)

区分:自由研究

対象:一般

新英語教育研究会の自己表現は、1960~70 年代の社会状況の悪さの中で、本来子どもがもつ表現欲求や学習意欲を喚起させるべく教師によって生み出された実践である。2013~2023 年及び 1974~1979 年刊行の『新英語教育』誌中の自己表現に関する記事をテーマ分析し、そこに潜む言語イデオロギーを探った。創造性・批判性を重視し、生徒の言語能力をそのまま認め、能力の拡張を目指すトランスランゲージング教育と共通するイデオロギーが見られた。

③ 「日本人英語学習者」を再考する—意図しない差別や解釈上の混乱を回避するために—

金澤 佑 (大阪大学)

区分:自由研究

対象:一般

英語教育の分野でよく使われる用語に「日本人英語学習者」というものがある。日本国内の学校で英語の授業を履修している学生などを指すことの多い用語であるが、「日本人」という用語には(a)日本国籍保持者、(b)日本語母語話者、(c)日本出身者、(d)日本民族、といった異なった含意があり、用法次第では意図しない差別や解釈上の混乱につながる可能性がある。本研究では、事例や考察を踏まえつつ、代替表現を提案する。

④ 批判的応用言語学の脱植民地化—日本の英語教育界で何ができるか—

田嶋 美砂子 (茨城大学)

区分:自由研究

対象:一般

批判的応用言語学では応用言語学の脱植民地化が強調されている。これは応用言語学が西洋中心主義、ネイティブ・スピーカー至上主義、白人(男性)中心主義に傾斜しがちである点を自己内省的に再考しようとする試みである。しかし、批判的応用言語学自体が西洋の知であることも否定できない。日本の英語教育界において応用言語学のみならず、批判的応用言語学をも脱植民地化することはできるのか。本発表ではその可能性を探究する。

A22 講義室 【ライティング】

① 英語ライティング活動における日本語使用の効果について

前田 廉太郎 (東京学芸大学大学院生)

区分:自由研究

対象:大学

本研究では、学習者が英語ライティング活動に取り組みやすくするための工夫を探ることを目的とし、大学生を対象に英語のみと部分的に日本語使用を許可したライティング活動を行い、産出内容を比較し、活動の取り組みやすさについてアンケート調査を行った。結果として、参加者の半数以上が日本語を使用した活動に取り組みやすさを感じていること、日本語使用によって学習者の英語使用量が減少するわけではないことが示された。

② 初級英語学習者(大学1年生)の英文ライティングの分析—産出語彙としての定型表現と語頻度に焦点を当てて—

西村 浩子 (周南公立大学)

区分:自由研究

対象:大学

本研究では大学1年生 55 名の英文ライティングを Martinez & Schmitt (2012) の PHRASE List 掲載の定型表現(FSs)について分析した。その結果、当該リスト掲載の 506 種の FSs のうちライティングで使用された FSs は 30 種で、全語数における FSs の割合は 1.8%、1回以上 FSs を使用した学生は 27 名だった。話し言葉では高頻度で使用されるが書き言葉では使用が稀な FSs の使用も見られた。FSs を効率的且つ適切に使えるようになるためには課題が多いことが示された。

③ 高校から大学へのより良いソフトランディングに関する一考察 (ライティングを中心に)―「論理・表現」への期待―

辻 美也子 (京都外国語大学)

区分:自由研究

対象:高等学校・大学

大学に入学してきて高校英語との違いに戸惑う学生は多い。特に高校ではあまりしっかりと取り組まれなかったことが多いライティングはその傾向が強い。この研究では、ライティングに焦点を当て、より良いソフトランディングを考えるために、大学生および高校教員という両方向からその実状に関する調査を実施した。今回、新学習指導要領一期生の大学入学を目前にして、その結果からの考察を大学・高校両方面に共有したい。

④ フィードバック処理中の思考や感情が第二言語習得に及ぼす効果―大学生を対象とした英作文指導実践のケーススタディー

鈴木 渉 (宮城教育大学大学院)・齋藤 玲 (東北大学)

区分:自由研究

対象:大学

本研究では、大学生を対象とし、筆記訂正フィードバック処理中の思考や感情が、英作文の正確性の向上や維持に及ぼす影響を検証した。その結果、フィードバックに対する思考と感情と、効果を測定するタイミング(書き直し、新作文)、さらには言語項目の種類(冠詞、仮定法、その他)の間に複雑な関連が示された。本発表では、理論や先行研究も踏まえながら、英作文におけるフィードバック指導の在り方を議論したい。

A23 講義室 【スピーキング】

① How Do Creative Students Process Language Production? Investigating the Relationship Between Creativity and L2 Speaking Performance

UEHARA, Soshi (Undergraduate Student, Hiroshima University)

区分:自由研究

対象:大学

Despite an established connection between language and creativity, research seldom explores this empirically within English language teaching in Japan. This study investigates the link between creativity and the English-speaking performance of Japanese university students. Implications of the experimental findings are discussed with regard to speaking instruction methods integrating creativity in English language education.

② Devising a Teaching Method of Retelling to Develop Improvisation in Novice English Learners

YOSHIZUMI, Hikaru (Graduate Student, Hyogo University of Teacher Education)

区分:自由研究

対象:高等学校

This study aims to examine how a devised retelling activity affects the development of improvisation in novice English learners. Previous studies have shown that the key to improvisation is the ability to paraphrase. The study looks into how the features of the learners' utterances in retelling differ from the original text.

③ Monologue as a Preparatory Task for Pair Interaction: Decreasing Speaking Anxiety and Improving Speaking Performance

MORI, Konosuke (Graduate, Kagoshima University)・ISHIHARA, Tomohide (Kagoshima University)

区分:自由研究

対象:中学校

This study aimed to reduce speaking anxiety and improve speaking skills throughout a monologue task as a preparatory activity for a subsequent language activity. The result indicated the task can reduce learners' state anxiety, and improve their fluency and complexity. Also, approximately 50 % of words produced in the task can be transferred to the actual conversation.

④ 「タスクの繰り返し」におけるブロック型とインターリーブ型の発話流暢性の向上の比較

上野 正和 (筑波大学大学院生)

区分:自由研究

対象:高等学校

発話流暢性の向上を図る方法の一つとして「タスクの繰り返し」があるが、日本人英語学習者を対象にブロック型とインターリーブ型に分けて実験を行った研究は少ない。また先行研究の Suzuki (2021) と上野 (2023) では実験期間や結果が異なっている。そこで本研究ではタスクの繰り返しを先行研究よりさらに長い期間(週 3 日×4 週間) 行い、どちらの型がより効果的に発話流暢性を向上させるかを検証する。

A24 講義室 【テストング・評価】**① Peer Evaluation and Feedback in University English Presentations**

KATAGIRI, Kazuhiko (Senshu University)

区分:事例報告

対象:大学

University freshmen delivered brief English presentations, freely selecting topics. Classmates actively participated, assessing and responding to each presentation. Presenters received T-scores based on peer evaluations across various criteria, providing valuable feedback.

② 日本人高校生の英語対話能力の評価—面接型テストと対話型テストの比較—

川村 一代 (皇學館大学)・鈴木 太郎 (津田学園中学校・高等学校)・藤田 賢 (愛知学院大学)

区分:自由研究

対象:高等学校

現行の学習指導要領より話すことの技能が 1 人で話す「発表」と 2 人以上で話す「やり取り」の領域に分けられた。「やり取り」の評価には生徒が教師や ALT と話す「面接型」テストと生徒同士で話す「対話型」テストがある。本研究では日本人高校生を対象に面接型テストと対話型テストを実施し、それらのテストによって引き出される発話を全体的・分析的に比較・検証し、それぞれのテスト形式が評価できる対話能力を明らかにする。

③ 中学生の「話すこと(発表)」における内容面の充実を目指すルーブリックと振り返りの連携

市川 竜朗 (福島県二本松市立二本松第二中学校)

区分:自由研究

対象:中学校

本発表は、ルーブリックと振り返りを連携させることで、生徒に ZPD(発達の最近接領域)を意識させ、それをもとに教師が授業を改善する振り返りの活用についての実践報告である。「話すこと(発表)」の内容面の充実に向けて、ルーブリックを活用して振り返りを行うことにより、生徒のパフォーマンスがどのように変化し、振り返りにおいてどのような記述をしたのか Assessment for learning の視点から報告する。

④ Do contexts in test instructions make a difference to test-takers' strategies in CEFR-J-based English reading tests?

NEGISHI, Masashi (Tokyo University of Foreign Studies)・MILLER, Matthew (Tokyo University of Foreign Studies)・

ZHOU, Yujia (Tokyo University of Foreign Studies)・TONO, Yukio (Tokyo University of Foreign Studies)・

MASUDA, Hinako (Seikei University)・SKERRITT, Graham (Tokyo University of Foreign Studies)・

CARPENTER, James (Tsurumi University)

区分:自由研究

対象:大学

Every form of human communication is contextualised. Communicative testing attempts to incorporate contexts and real-life tasks into the test. We will investigate through questionnaires and retrospective interviews to what extent the contexts and instructions influence the test-taking process of CEFR-J-based reading tests. Results are expected to help further test development.

A25 講義室 【SLA・言語習得・心理言語学】**① 母語の書記体系が第二言語におけるスループ効果に及ぼす影響—段階的統合モデルの追検証—**

石崎 貴士 (山形大学)・吳如 惠 (銘傳大学)

区分:自由研究

対象:大学

筆者らによる先行研究で第二言語学習者に見られる言語内と言語間のスループ効果の段階的な統合モデルを提唱したが、追検証において母語に複数の書記体系が存在するとそれにより当該モデルでの段階に差が見られたことから、本研究では母語における書記体系の違いがスループ干渉効果に及ぼす影響について日本語母語話者の英語学習者と台湾華語母語話者の英語学習者を対象に実験を行い検証している。

② バイリンガル・レキシコンの発達—外国語学習における概念形成—

赤松 信彦 (同志社大学)

区分:自由研究

対象:大学

外見的特徴と内面的特徴の異なる 4 種類の具象語(野菜、フルーツ、ナッツ、豆)とそれらを意味する擬似英単語 56 語を用いて、36 名の日本人英語学習者(大学生)に対し、3 週間にわたり 15 回のオンラインによる学習課題を課した。学習終了後、個別に対面で行った 3 回の事後テスト(1 日、1 週間、3 週間)の分析の結果、外見と内面的特徴の差異が大きい学習対象ほど学習が困難であり、既存概念の変容の難しさが示唆された。

③ 場依存・場独立とテキスト強化が第二言語習得に与える影響

目黒 庸一 (上智大学大学院生)

区分:自由研究

対象:大学

本研究は、個人差の一つ、場依存・場独立と、テキスト強化を用いた目標言語のインプットが、第二言語学習者の認知プロセス、テキスト理解、目標言語の学習に、どのような影響を与えるかを検証した。場依存・場独立は、情報処理において、外的な情報から受ける影響の程度を示す認知スタイルである。テキスト強化は、テキスト中の特定の言語項目を視覚的に強調することで、学習者の注意を引き、認知プロセス、学習を促す教授法である。

④ Stance Control and Writer/Reader Visibility (WRV) in Different Registers: A Study Based on the CORE Corpus

IIJIMA, Masayuki (Graduate Student, Kobe University)

区分:自由研究

対象:一般

Using CORE corpus, this study examined the frequency of 1st/2nd personal pronouns to clarify writer/reader visibility (Petch-Tyson, 1998) in different registers. The analysis showed that it is higher in "TV/Movie", while lower in "Encyclopedia." These findings will shed light on development of teaching materials for stance control in L2 production.

A26 講義室 【SLA・言語習得】

① 日本語と英語の語順と発音の違いの気づきを促す指導

小林 啓子 (大分大学)

区分:事例報告

対象:高等学校・大学

2年間の移行期間を経て 2020 年度に、「日本語と英語の語順や発音の違い等の気づきを促す」外国語科の指導を示した小学校新学習指導要領が施行された。移行期間時の 5、6 年生が 2022 年度から高校新課程の生徒となった。日本語と英語の語順と発音の違いへの気づきについて旧課程の履修者との間に見られた同異を踏まえ、高校と大学の授業でこの気づきに関わる指導を継続した。本発表は実践と学習者の状況の報告である。

② 高校生の名詞句把握能力の発達プロセス—個人差要因と発達パターンの類型化—

鈴木 祐一 (神奈川大学)・佐藤 選 (東京学芸大学)

区分:自由研究

対象:高等学校

本研究の目的は、日本の高校生における名詞句の把握能力の発達プロセスを明らかにすることである。関東圏の私立中高一貫校の高校生 211 名を対象に、3 年間にわたって名詞句把握能力テストと言語適性、動機づけ、感情、学習時間に関するアンケートを実施した。名詞句把握能力の発達パターンを類型化した結果、学年が進むにつれて言語適性の影響が減少し、動機づけと感情が名詞句の把握能力に与える影響が大きくなる傾向を示した。

③ 高校生の名詞句把握に関する 3 年間の縦断的研究—Common Errors の検証—

伊藤 泰子 (神田外語大学)・砂田 緑 (東京学芸大学)・加藤 嘉津枝 (日本大学)・高木 哲也 (筑波大学大学院生)

区分:自由研究

対象:高等学校

本発表では 180 名の日本人高校生を対象に行った主語位置の名詞句把握能力に関する縦断的研究の結果を発表する。本研究のために開発されたテスト(KB テスト)を計 8 回実施した。その結果、全体の平均正答率は 3 年間かけて伸びたが、名詞句の種類により最終的な到達地点には差が見られた。また、This、That、Which の直後に動詞を挿入するエラーが目立った。発表では結果の詳細を報告し、教育的示唆を論じる。

④ 日本語母語英語学習者の名詞句使用における習熟度別の特徴

田中 広宣 (東京大学)

区分:自由研究

対象:一般

本研究では、学習者コーパス ICNALE Spoken Monologue (Ishikawa, 2014)における日本語母語英語学習者のデータを対象に、名詞句の産出を習熟度別に分析した。その結果、習熟度があがると産出人数が増える構造と、習熟度によらずほとんど産出されない構造があることが分かった。このことから、発達の指標になりうる名詞句構造とそうでない名詞句構造がある可能性が示唆された。

A27 講義室 【教材・発音】**① 英語教科書に採用された、タイタニック号のミス・エヴァンズは実在の人物か—ノンフィクション教材における史実と脚色について考える—**

小笠原 真司 (長崎大学)

区分:自由研究

対象:一般

約40年前のある教科書に、タイタニック号事故の際乗っていた救命ボートの席を子連れの母親に譲った人物の話が採用された。しかし、名前がミス・エヴァンズ以外、情報は伏されていた。調査の結果、モデルの人物は特定できたが、ノンフィクション以上の脚色が施されていることが判明した。また類似の内容が台湾の教科書にも採用されていた。内容と真実との乖離を明らかにし、その原因を探求し、ノンフィクション題材について考える。

② 英語検定教科書コーパスに基づく高頻度コロケーションの分析

中野 珠悠 (京都大学大学院生)・梁 震 (京都大学大学院生)・笹尾 洋介 (京都大学)

区分:自由研究

対象:小学校・中学校・高等学校

本研究の目的は、小中高の新英語検定教科書におけるコロケーションの使用実態を明らかにすることである。具体的には、BNCにおいて高頻度で出現し、かつ意味的透明性の低い505種類のコロケーションが抽出されたThe PHRASE List (Martinez & Schmitt, 2012)との比較調査を行った。その結果、全学年を通して、当該リストのコロケーションのうち約15%が一度も使用されておらず、繰り返し出現するコロケーションは非常に限定的であることがわかった。

③ 英作文と発話におけるタスクの影響と使用語彙及び文法に関する調査

尾崎 ちひろ (東京電機大学)

区分:自由研究

対象:高等専門学校

タスクベースの言語指導では、タスク別に使用傾向の高い語彙や文法を言語材料として学習者に提示することで、言語活動がより活発になると考えられる。しかしながら、タスクやテキストタイプ毎に典型的に使用される語彙や文法を調査した実証研究はまだ少ない。本研究では独自に構築した学習者コーパスを用いて、日本人初級英語学習者が使用する語彙や文法をタスク別に抽出し、タスク特有の語彙及び文法の調査を行なった。

④ 日本語を母語とする大学生と英語母語話者への英単語の音節数カウント実験—「通じにくい発音」の一因を探るためのパイロットスタディー—

高山 芳樹 (東京学芸大学)

区分:自由研究

対象:大学

日本語を母語とする英語学習者の発音が、相手に通じにくい歪んだ発音になってしまうのは、モデル音声の知覚段階での音韻認識にも一因があるのではないかという仮説のもと、その検証の入り口としての実験を行った。英語母語話者11名と、日本語を母語とする英語専攻の大学生25名および英語非専攻の大学生44名に、音声による70個の英単語の音節数カウントテストを与え、3グループ間での音韻認識の相違を探った。

A28 講義室 【教材】**① 「論理・表現」の検定教科書におけるライティングタスクの分析—テキストタイプとジャンルの観点から—**

勝久 愛 (鹿児島女子短期大学)

区分:自由研究

対象:高等学校

近年、ライティング教育においてジャンルが重視され、教材の分析が行われている。しかし、タスクに伴うモデル文がジャンルごとにどの程度書き分けられているか、プロンプト等においてジャンルに関わる知識がどの程度提供されているかは不透明である。本調査では、Tardy(2009)のジャンル知識の枠組みを参照し、高等学校の「論理・表現」の教科書のライティングタスクのテキストタイプ、モデル文の言語的特徴、プロンプト等を分析する。

② 論理・表現Ⅱに掲載されているスピーキング活動におけるタスク性分析—論理・表現Ⅰとの比較と論理・表現Ⅱの特徴について—

山下 純一 (函館工業高等専門学校)・白田 悦之 (函館工業高等専門学校)・小野 祥康 (北海道科学大学)・

照山 秀一 (札幌学院大学)・酒井 優子 (東海大学)・三澤 康英 (札幌龍谷学園高等学校)・

中村 洋 (北海道小樽市立望洋台中学校)・遠藤 香菜子 (米子工業高等専門学校)・村田 琴美 (北海道札幌市立丘珠中学校)・

中山 穂乃花 (北海道遠軽高等学校)

区分:自由研究 対象:高等学校

本研究では、論理・表現Ⅱの教科書に掲載されているスピーキング活動のタスク性を分析し、山下他(2023)で分析された論理・表現Ⅰの結果と比較した。その結果、全体の傾向として、論理・表現Ⅰよりも論理・表現Ⅱの方が、有意にタスク性が高いことがわかった。これは、学年が上がるにつれて、ディベートやディスカッションなどのタスク性が高い活動を中心に構成されているためこのような結果が得られたと考えられる。

③ 高等学校外国語科目「論理・表現」の検定教科書分析—論証要素の扱われ方を中心に—

三好 徹明 (関西国際大学)

区分:自由研究 対象:高等学校

本発表では、高等学校外国語科目「論理・表現」の検定教科書で扱われている論証要素(意見・主張、主題、理由、根拠、事実・証拠、結論)に関わるメタ言語を分析した結果と、大学アカデミックライティング教育との接続の観点から考察を報告する。分析対象とした検定教科書は、9社から出版されている3科目の計27冊であり、「論理・表現Ⅰ」「論理・表現Ⅱ」「論理・表現Ⅲ」の各科目の教科書について分析をおこなった。

④ 中学英語検定教科書におけるダイアログの会話分析

西村 秀之 (玉川大学)・黒嶋 智美 (玉川大学)・工藤 洋路 (玉川大学)・鈴木 彩子 (玉川大学)

区分:自由研究 対象:中学校

本研究は、中学校の英語検定教科書におけるダイアログを会話分析の知見に基づいて分析し、教科書のダイアログの特徴を記述することを目的とする。分析では質問—応答といった隣接ペアと呼ばれる発話の連鎖組織に焦点を合わせた。その結果、実際の相互行為とは異なるプラクティスが用いられている事例があることが判明した。この現象は、教科書のダイアログが制作上の制約および教育実践にかかわる目的を反映していると考察出来る。

A31 講義室 【CLIL・CBI・EMI】**① CLIL と SDGs 活動を通じた英語力と社会性の育成—Output 体験を最大限に生かす—**

石橋 俊 (佐賀県立佐賀東高等学校)

区分:事例報告

対象:高等学校

具体的な課題を設定し、主体的・協働的に課題解決を図る力を育成していくために、CLIL の教育方法を活用して授業を行った。タスクは SDGs に繋がる活動を設定し、社会問題にも目を向けさせた。学力面でポジティブな成果が上がるたとともに、校外学習にも効果が現れた。

② The problem and the effectiveness of CLIL

OKUBORA, Junichi (Kohyagi Junior High School, Nagasaki)

区分:自由研究

対象:中学校

As an effective means of improving English proficiency, CLIL using English is practiced in many countries around the world, with social studies and science at the core. I believe that CLIL will motivate students to learn English and other subjects, improve their academic ability and broaden their interests.

③ 社会科学系学科向け CLIL 教材開発とその成果—社会科学専門教員との協働と CLIL 授業への学生の反応—

阿川 敏恵 (星薬科大学)

区分:事例報告

対象:大学

本発表では、1)社会科学系学生向け選択必修英語科目のためのオリジナル CLIL 教材の開発を報告し、2)この教材を使用した英語科目への学生の反応の調査結果を報告することを目的とする。まず、オリジナル教材開発の必要性和利点を示し、社会学系教員と英語教育学教員の協働による教材開発の過程を報告する。次に、この教材を使用した科目の受講生に対する質問紙調査の結果を示し、その成果と改善点を示す。

④ 観光英語の授業における CLIL 実践—思考力を鍛え発信力を高める—

岩崎 恵実 (秀明大学)

区分:事例報告

対象:大学

即戦力として観光業界で活躍する人材を育成するために、観光英語の授業では、思考力を磨き発信力を高めることを目的とする授業を展開している。母語を積極的に活用し、インプット/アウトプット量は $i+1$ を基調とする。大切にしていることは、共有基底言語能力(Common Underlying Proficiency, CUP)を鍛え、自らの考えを表現するために必要な英語力を体得することである。学年や学生の能力に応じた段階別の取り組みについて共有したいと思います。

A32 講義室 【学習者】**① リテリング活動と SEL の統合のエビデンスと実践**

長野 綾子 (福岡県立新宮高等学校)

区分:事例報告

対象:高等学校

教育的介入として、SEL(社会性と情動の学び)能力を高めることで、学習者の読解能力とリテリング力をどの程度高めることができたか検証することを目的としている。CRF(いわゆる到達度評価)で学習者の ZPD(発達の最近接発達領域)を特定後、エビデンスに基づいた授業を実施した。結果、学習者ができるようになった CRF の項目が約2倍に増えた。また、学習者の自己認識と人間関係構築力を促すことで、英語理解力とリテリング力が向上した。

② やり取りの振り返りで学習者の主体的な気づきを促す実践研究—やり取りのサンプル提供を通して—

吉崎 理香 (富山国際大学)

区分:自由研究

対象:中学校

本実践研究では中学1年生80名を対象に学習者間インタラクションの質の向上をめざし、ペアで行う振り返りの中で同トピックでのやり取りのサンプル音源を与えて気づきの促進を図った。振り返りでの筆記ランゲージングと振り返り前後のやり取りの書き起こし、事後アンケートの記述から、サンプル音源の有無は振り返りの内容に影響するのか、振り返りでの気づきは振り返り後のインタラクションの質の向上に貢献するのかを検証した。

③ 学習開始時の英語力と動機づけが学習成果に及ぼす影響

寺井 雅人 (愛知工科大学)・三上 綾介 (愛知学院大学)

区分:自由研究 対象:大学

講義開始前の学習者の動機づけや英語テストの得点が、講義終了後の英語習熟度の予測にどの程度影響するか検証した。動機づけの質問紙を、講義の初回に配布し、英語習熟度を測定する読解と聴解テストを講義開始前と最終回後に実施した。ベイズ回帰分析の結果、動機づけの係数は英語習熟度の伸びとの関連性を示さなかった。一方、テスト得点の係数は最も値が大きく、得点が高いほど、講義終了後のテスト得点が低い傾向が見られた。

④ 英語学習者の自律性を構成する多面的特性—高校生、高専生、大学生の比較—

三浦 定晟 (玉川大学大学院生)・森本 俊 (玉川大学)

区分:自由研究 対象:高等学校・大学

本研究では、日本人高校生 105 名および英語教員養成課程に在籍する大学生 129 名の英語学習に対する自律性を「学習者自律性(オートノミー)尺度」(Murase, 2010)を通して分析し、高専生 167 名を対象とした石貫(2021)の結果と比較した。その結果、高校生と高専生には自律性の順位に違いは見られなかった一方、大学生は動機づけ・メタ認知・情意から構成される心理的自律性の順位が最も高いことが示された。

A33 講義室 【語彙】

① 英語教員養成学生の英語辞書と語彙に関する意識調査と検定教科書について

渡慶次 正則 (名桜大学)

区分:自由研究 対象:大学

第1段階の英語教員養成課程学生(n=22)対象の調査票では、英和辞書の凡例に対して(15問)、「コロケーション」(55%)、「単語使用上の制限」(64%)の認識が低く、「単語を知っているとは何か」(Nation, 2001)の質問では、「受容」と「産出」の相関関係が分散した(0.2~0.7)。第2段階の検定教科書分析では中学校(6社18冊)に比べて高等学校(5社10冊)は英和辞書活用の必要性が高い。

② 想起練習を用いた語彙学習における手がかりと想起の方向との関係—例文と句の比較から—

水書 亮 (筑波大学大学院生・日本学術振興会特別研究員)

区分:自由研究 対象:高等学校

本研究では、日本人高校生を対象として、語彙を想起する際に提示する手がかり(例文・句)と想起の方向(語彙の意味または綴りを思い出す)との関係を調査した。語彙の意味あるいは綴りを想起する群に参加者を分けて、各群が例文および句の2条件で学習した。その結果、想起練習を用いた語彙学習に例文・句が与える効果は両群において同程度であり、語彙サイズの大きい学習者ほど学習成果がより大きくなることが示された。

③ 多義とプロトタイプ再考—使用依拠モデルに基づいて—

井口 智彰 (大島商船高等専門学校)

区分:自由研究 対象:一般

多義語にはプロトタイプ的な中心義があり、中心義からの意味的拡張により複数の異なる意味が生じ、ネットワーク的に結びついている。この仮説に基づき、多義語の効率的な学習法として中心義を明示的に教える手法が広がり、それに関連した教育実践や研究が積み重ねられてきた。しかしながら、その仮説は必ずしも実証的なデータに基づいて構築されているとはいえない。本研究ではこの仮説の妥当性を検討し、その考察を試みる。

④ Contextual Diversity and Incidental L2 Vocabulary Learning

OIKAWA, Gaia (Graduate Student, Tohoku University)

区分:自由研究 対象:大学

"Contextual diversity (CD) refers to the number of different contexts in which a word appears. The present study investigated effects of CD on L2 incidental vocabulary learning through reading while manipulating CD by different genres of learning materials. Participants were Japanese EFL learners, allocated to three conditions (high variability, low variability, and control) (N=125). The results showed no significant difference between high and low CD groups, indicating that learners picked up new words regardless of the variability in contexts."

A34 講義室 【語彙】**① Reversed Subtitling が日本人学習者の付随的語彙学習に与える効果について**

金戸 光里 (熊本学園大学大学院生)

区分:自由研究

対象:大学

本発表では、Reversed Subtitling (RS) が日本人英語学習者の語彙学習に与える効果について検証する。RS とは、映像と L1 音声+L2 字幕のマルチメディア教材である。Standard Subtitling (映像と L2 音声+L1 字幕, SS)や Bimodal Subtitling (映像と L2 字幕+L2 音声、BS)に比べ、RS に関しての研究はまだ少ない。本研究では 2 分弱のドキュメンタリー映像を使用し、英語専攻の大学生を被験者として実験を行った。一般的に使用される BS と比較して、RS を用いた教材の有効性を考察する。

② 学習者はどれくらい多くの英単語の意味を思い出せるのか—項目反応理論による意味想起型語彙サイズテストの検証—

濱田 彰 (神戸市外国語大学)・小島 ますみ (名古屋大学)・相澤 一美 (東京電機大学)・磯 達夫 (東京電機大学)

区分:自由研究

対象:大学

本研究は、日本人英語学習者がどれくらい多くの単語の意味を思い出せるのかを検証した。具体的には、意味認識・想起型の語彙サイズを比較し、単語頻度や英語習熟度との関わりを調査した。結果、多くの学習者が 2,000 語レベル以上の単語の意味を思い出せないことがわかった。また、意味認識・想起型語彙サイズの差は、単語頻度と熟達度が低くなるにつれて拡大した。発表では、結果から示唆される語彙指導の目標設定等について議論する。

③ 接頭辞の意図的学習における具体例の提示が形態素知識と形態素認識に与える影響

鈴木 健太郎 (北海道教育大学)

区分:自由研究

対象:大学

日本人大学生が、接頭辞とその意味を、形式と意味(例. inter-「間に」)のみが提示された統制条件と、単語の例(例. international「国際的な」)も与えられた例示条件のいずれかで学習し、接頭辞の意味を問う形態素知識テストとその接頭辞を含む別の語(例. interpersonal)の意味を問う形態素認識テストに回答した。形態素知識テストでは条件間の差はなかったものの、形態素認識テストの得点は例示条件において高い傾向にあった。

④ 発信語彙知識に対する話し言葉と書き言葉による再話活動の効果

佐藤 扶 (東京学芸大学連合大学院生)

区分:自由研究

対象:高等学校

本研究では、英語による再話活動のモードの違いが発信語彙知識の習得に有効か検証した。高校生を対象に、口頭と筆記で再話を実施するクラス2つに分け、再話活動を実施した。実施前、終了後、1週間後に発信語彙知識を測定した。口頭と筆記では、クラス間には差はないが、事前—事後と事前—遅延の間で有意な差がみられた。したがって、口頭でも筆記でも再話を行うことで、発信語彙知識が獲得・保持されていることが示唆された。

A35 講義室 【動機付け】**① 日本人高校生の英語学習動機づけと情意的要因に及ぼすオンライン英語研修の経時的変化と効果—混合研究法を用いて—**

渡辺 正隆 (専修大学熊本玉名高等学校)

区分:自由研究

対象:高等学校

本研究は、オンライン英語研修を受講した日本人高校生の英語学習動機づけ、コミュニケーション意欲、異文化友好志向の経時的変化を混合研究法により検証した。生徒は各研修後に振り返りシートを記入し、研修前後及び 3 カ月後に各変数に関するアンケートに回答した。その結果、コミュニケーション意欲に関して統計的に有意な差が認められた。これは、研修後に英語で対話する意思やそれに伴う行動が持続される可能性を示唆している。

② 非同期での英語授業におけるソーシャルプレゼンスと他の個人差要因

篠崎 文哉 (大阪教育大学)

区分:自由研究

対象:大学

本研究では、非同期での活動を想定し、国際的志向性(IP)がソーシャルプレゼンス(SP)やコミュニケーション意欲(WTC)に影響を与え、WTC が動機づけを通して英語力に影響を与えているという仮説をもとにモデルを構築した。大学生 320 名分のデータを用いて共分散構造分析を行った結果、IP→SP のパスは有意でなかったが、IP→WTC→SP のパスと、IP→WTC→動機づけ→英語力のパスは有意であり、最終モデルはある程度良好な適合性を示した。

③ 英語学習における動機づけとエンゲージメントの相互作用—心理ネットワークアプローチ—

櫻村 祐志 (明治大学大学院生)・奥貫 明子 (明治大学大学院生)・鈴木 洋海 (明治大学大学院生)・
中村 姫奈子 (明治大学大学院生)・神野 皓大 (明治大学大学院生)・廣森 友人 (明治大学)

区分:自由研究 対象:大学

本研究は、複雑系理論に基づく英語学習における動機づけとエンゲージメントの関連性について、心理ネットワークアプローチを用いて検討した量的研究である。日本の大学で英語を学ぶ 177 名の大学生を対象に質問紙調査を実施した。分析の結果、(a)感情的エンゲージメントの中心的役割、(b)エンゲージメント全体を促進するための同一視的調整の重要性が明らかになった。以上より、理論的示唆及び教育的示唆について言及する。

④ The Effects of Code-switching and Translanguaging on Japanese EFL Learners' Willingness to Communicate

SATO, Rintaro (Nara University of Education)

区分:自由研究 対象:大学

This study investigates how using L1 (Japanese) affects advanced EFL learners' willingness to communicate (WTC) during English conversation. Despite a monolingual approach that favors the exclusion of L1, findings suggest that strategic use of L1 through code-switching or translanguaging can positively impact L2 conversations, highlighting the complex dynamics of WTC.

A36 講義室 【ICT・CALL・AI】

① 機械学習ロイロノートの資料箱と提出箱—録音の活用と評価に向けて—

近藤 恵理 (北九州市立大学大学院)

区分:自由研究 対象:高等学校・大学

近畿大学と東海大学付属福岡高等学校にて配布されたロイロノートを活用し、資料箱にある音声を聞くことを課題とし、音声を録音する宿題を提出箱に提出させる。実験としては、音声を聞いて学習するタスクを課す場合と画像から音の発声を認識させるタスクを課す場合から、音声を取り出す手法。母音と子音という音素、モーラやシラブルという仕組みを音声認識ソフトで分析を行い、統計によりデータの特徴を掴む。

② 大学教養英語科目における機械翻訳(MT)活動の報告と導入に向けた提案

中野 優子 (東北学院大学)

区分:事例報告 対象:大学

英語教育は AI の発展とどう向き合うべきであろうか。学生に機械翻訳を禁じることに限界を感じている教員は多いであろう。本研究では、大学教養英語科目の 2 年生の大小2クラスを対象に MT 活動を行い、事後アンケートを行った。本発表では、実際の活動内容とその結果を示し、教室での MT 活動の導入を推奨するとともに、フィードバック、クラス人数、MT 使用のルールや使用方法などの講義の必要性、導入学年などについても報告する。

③ スピーキング指導における機械翻訳使用—学習者の評価—

伊勢 恵 (東北福祉大学)・久保田 佳克 (東北福祉大学)

区分:自由研究 対象:大学

本研究では、初級レベルの大学生を対象としたスピーキング指導に機械翻訳を活用し、英語学習における機械翻訳使用に対する学習者の評価を検証した。必要性、効果、今後の利用についての 7 件法評価ではいずれの項目においても否定的な評価は見られなかった。また、翻訳機能と読み上げ機能を比較すると、読み上げ機能の方が全ての項目において評価が高かった。自由記述では、機械翻訳の利便性よりも学習支援としての利点が多かった。

④ 生成 AI を用いた自由英作文とその効果

山本 孝次 (愛知県立刈谷北高等学校)

区分:自由研究 対象:高等学校

生成 AI を自由英作文の指導に効果的に使用する方法を模索した実践を紹介する。2023 年度に「論理・表現III」の授業にて自由英作文課題に取り組む際に、AI を活用した英文作成ツール TRANSABLE を用いてパラグラフライティングをさせた。英文を書いた生徒自身が生成 AI を用いて初稿を修正することは、一人の教員が多数の英作文を添削するよりもはるかに効率的であった。AI を用いた英作文に対して生徒が感じたメリット・デメリットを紹介する。

A37 講義室 【ICT・CALL・AI】**① Key to Upgrade the English Chat Activity: Analysis from International Students' Perspectives**

KAWASAKI, Noriko (University of Miyazaki)

区分:自由研究

対象:大学

Many of Japanese universities offer extracurricular learning opportunities to improve students' language skills. The English chat activity is a representative example. Although several studies on the activity with analysis from Japanese students' perspectives have already been done, but only a few of international students, who are key players, are included. This research analyzes the activity from international students' perspectives.

② The Impact of Padlet, Google Meet, and Flip on English Language Learning

KOBAYASHI, Sho (Osaka Kyoiku University)

区分:自由研究

対象:大学

This study investigated the effects of three computer-mediated communication platforms (Padlet, Google Meet, and Flip) on English language learning among Japanese and Taiwanese students. The use of these platforms enhanced online interactions, with shared discussion boards and video calls promoting speech, and a video-sharing program with subtitles and repetition improving understanding and enjoyment.

③ IELTS スピーキング対策学習における ChatGPT の活用について

小泉 有紀子 (山形大学)・木村 太一 (東北大学)

区分:事例報告

対象:大学

ChatGPT を活用した IELTS スピーキングテスト対策学習の実践結果を報告する。テスト対策を指導者なしでも効果的にを行い、経験を多く積む手立てとして、学習者が模擬問題の解答を録音し文字起こししたものを ChatGPT に入力し、添削結果を自身で検討するという流れで学習を実践した。大学学部生 19 名が毎週 1 回全 9 回の学習を行う前と後の模擬テスト結果や学習者アンケート結果から、スピーキングテスト対策における ChatGPT 活用の可能性について検討する。

④ デジタル時代の多読活動が拓く英語教育の可能性—学習者への多面的影響と効果的な活用戦略—

大崎 美佳 (広島女学院大学)

区分:自由研究

対象:大学

デジタルライブラリーを活用した多読法の特徴や利点、そして学習者の受容に焦点を当て、その効果を多面的に分析する。学生の個々のレベル別語彙テスト、リーディングスピード、読書量、メンタル面の変化などを評価し、効果的な活用法を模索する。デジタルライブラリーによる多読法が、従来の方法と比べてどのような違いをもたらすかを明らかにし、これからの学習支援の方向性に示唆を与える。

A41 講義室 【学習方略・文法】**① 高等学校の「英語コミュニケーション」の定期考査と学習方略の関係について**

境 奈津希 (東京学芸大学連合大学院生)

区分:自由研究

対象:高等学校

「英語コミュニケーション」の定期考査に向けて高校生が選択する学習方略は定期考査の出題形式と関係があるのかを明らかにすることを目的とし、高校生 697 名を対象に質問紙への回答を求め、参加者の一部にはインタビューで定期考査と学習方略について詳細に尋ねた。その結果、問題の種類によって出題形式と学習方略の関係は異なるということが示唆された。また、問題の様子が変わった際に学習方略を見直した参加者もいた。

② 日本人 EFL 学習者である中学生のオーラル・コミュニケーション・ストラテジー使用の現状

会田 裕子 (東京都国分寺市立第一中学校)

区分:自由研究

対象:中学校

公立中学校 5 校に在籍する中学 2 年生 420 名と担当英語教師 14 名を対象に、オーラル・コミュニケーション・ストラテジー(OCS)質問紙(中谷, 2006)を用いて調査を行った。結果、対象の中学生は発話場面より聴解場面での OCS 使用認識があり、やり取りに関する OCS の使用認識が他項目に比べ低かった。また、英語話者との接触機会が多い生徒ほど OCS の使用認識が高かった。さらに、教師と生徒の OCS 使用認識には違いが見られた。

③ **Pragmatic Strategy Combinations Among Native and Nonnative English Speakers in Apologies and Refusals**

HIJIKATA, Yuko (University of Tsukuba)・ROBERTS, Rachael (Kanda University of International Studies)

区分:自由研究 対象:一般

Native and nonnative English speakers' production of apologies and refusals were examined. The participants (n = 295) completed a discourse completion task relating to workplaces, involving three apology and three refusal situations. We discuss the relationship between pragmatic scores and their strategy use, including the impact of different strategy combinations.

④ **統語的プライミング効果発現を促す活動が日本人英語学習者のライティングにおける既習文法項目使用に及ぼす影響**

濱田 真由 (神戸大学)・増見 敦 (神戸大学附属中等教育学校)

区分:事例報告 対象:中学校

本研究では、日本人英語学習者を対象に、目標文法項目の使用を暗示的に促進する統語的プライミング効果発現を促すライティング活動を実施し、項目使用頻度・使用の正確性に及ぼす影響について調査を行った。その結果、持続的に既習の目標文法項目に潜在的に接触していくことによって、項目使用頻度・正確性が向上し、学習者の文法項目の知識が宣言的知識から手続き的知識に移行したことが明らかとなった。

A42 講義室 【教員養成・教師教育】

① **小学校教員を目指す学生の小学校英語指導に対する自己効力感**

津田 敦子 (琉球大学)・竹内 理 (関西大学)

区分:自由研究 対象:大学

本研究では、小学校教員志望の学生が小学校での英語指導に対してどのような自己効力感を持っているか調査し分析した。自己効力感とは、実際の英語力以外の要素、英語の好き嫌い、英語の自信の有無という感情が影響を及ぼしていることが明らかになった。彼ら自身が英語を好きになり英語に自信を持てるような実践、授業実践力を高め英語での成功体験を味わえるような取組が英語指導の自己効力感の向上に繋がる可能性が示唆された。

② **小学校外国語指導法における文字・音韻指導と教職課程学生の指導意識**

安達 理恵 (椋山女学園大学)

区分:自由研究 対象:大学

2020年より初等教育の教職課程の学生を対象にした、外国語指導法の授業では、文字、音韻、外部講師によるジョリーフォニックス紹介を取り入れてきた。これらの指導によっての外国語指導意識にどのような効果があったか分析を続けている。その結果、ほとんどの学生の読み書きに関する指導意識には認知的に効果があったと考えられる一方、実際の指導力向上には模擬授業実践でのさらなる改善が必要との結論に至った。

③ **小学校英語教員養成課程における模擬授業でのピア・フィードバックコメント分析**

馬場 千秋 (帝京科学大学)

区分:自由研究 対象:大学

本研究では、小学校教員養成課程の学生に模擬授業でピア・フィードバックを行った場合、(1) コメントの観点と内容、(2) 教育実習の経験の有無によって、コメントの内容には違いがあるのかを分析した。その結果、(1)は、声の大きさや視線等の指導の姿勢、板書や発問などの指導技術に関する具体的で授業改善に役立つコメントが多く見られた。(2)の教育実習の有無によるコメント内容の大きな違いは見られなかった。

④ **教職大学院における現職院生と学部卒院生の英語実践力の伸長—小学校における長期の英語授業実践に基づいて—**

大場 浩正 (上越教育大学大学院)

区分:事例報告 対象:大学

本発表では、教職大学院で学ぶ現職院生と学部卒院生(各3名)が、小学校現場での3か月半の英語授業実践を2回経験し、どのように英語の実践的力を伸ばしていくのかを報告する。1年目と2年目の自己評価(学校課題解決、臨床力、協働力、即応力の4観点)の比較から現職院生と学部卒院生では英語実践力の伸長に対して異なる意識が見られた。その要因について自由記述の振り返りとインタビューのデータに基づき考察する。

A43 講義室 【教員養成・教師教育】**① 英語教育の目的と英語教師のあり方を問い直す—対話的なオートエスノグラフィーを拠り所にして—**

佐々木 陽太 (広島大学大学院生)・中原 瑞公 (大島商船高等専門学校) 区分:自由研究 対象:一般

本研究は、「存在論的接近」の観点に立脚し、英語教育の目的論と英語教師のあり方を再検討することを試みる。現在の英語教育では、英語教師の役割や英語教育の目標が、規範的・制度的なアプローチに基づいて一義的に定義されている。2人の英語教師による対話的なオートエスノグラフィーを拠り所にした個別的なプロセスを踏むことで、英語教育の目的をもう一度見つめなおし、従来とは異なる英語教師のあり方を探究する。

② 英語科教員養成課程における学生の「学習者支援」についての考えの変容に関する実践研究—講義受講前・後の質問紙の記述分析に基づいて—

篠村 恭子 (島根大学)・大谷 みどり (島根大学教職大学院) 区分:自由研究 対象:大学

英語科教員養成課程での講義を受講した大学2回生の「学習者支援」についての考えがどのように変容するかを受講前後の質問紙の記述を分析することを通して明らかにした。受講後の記述では、記述量や言及された観点が増えたことに加え、「支援者としての自覚」「つまりの予見の重要性」など実際に学校現場で教師として「学習者支援」に取り組む際に必要となる教師としての視点も多く見られるようになった。

③ 英語教授法に関する ICT を活用したグループ探究—模擬授業動画の作成と英語での発表—

藤居 真路 (九州ルーテル学院大学) 区分:自由研究 対象:大学

英語科教育法において、実践的指向性をもって英語教授法を深く学ぶために、グループで比較検討し、模擬授業動画を作成して、これから目指すべき英語科の教授法について英語で発表してもらった。この教育実践の概要を説明するとともに、学生たちが何を計画し、何をどのようにして学んでいったのかについて探究したい。そのことを通して、英語教授法に関するグループ探究における学びの構造を探究した結果を発表したい。

④ 教員養成課程学生の小学校英語に関する不安と言語教師認知の事例研究

田所 貴大 (宇都宮大学) 区分:自由研究 対象:大学

大学における教員養成課程において、小学校英語に関する科目として「外国語の指導法」などが設置されている。教員養成の充実を図る一つの方法として、教員養成課程の学生の視点を取り入れることが考えられ、どのようなことを考えていて、何に不安を感じているのかを探究する必要がある。そこで、本研究は、教員養成課程学生の小学校英語に関する不安および言語教師認知を明らかにすることを目的とし、インタビュー調査を行なった。

A44 講義室 【小学校英語】**① 英語学習による児童の英語運用能力の変容を探る—小学2～6年生のデータから—**

物井 尚子 (千葉大学)・河合 裕美 (神田外語大学)・池田 周 (愛知県立大学)

区分:自由研究 対象:小学校

本研究の目的は、小学校で1年以上の英語学習を経験した児童(2～6年生 534名)の語彙知識と音素認識の発達の特徴を探究することである。5学年を比較し、英語学習による語彙知識と音素認識の発達過程を明らかにする。この研究から、英語学習経験の増加に伴う学習者の語彙力、音素認識のその後の力を推測し、指導に生かすことができる。

② 小学校における英語プロソディ指導の縦断的研究

岡本 真砂夫 (兵庫県姫路市立高浜小学校) 区分:自由研究 対象:小学校

英語発音の理解性を高めるため、小学校5、6年生児童を対象にプロソディに重点を置いた発音指導を、帯活動として1年間実施した。児童44人から各学期に収集した音声データを用いて、7人のALTによる理解性の評価、ならびに音響音声分析を実施した。その結果、理解性評価スコアが向上し、正しく核配置ができる児童が増加したことから、プロソディ指導を一定期間行うことに効果があることが示唆された。

③ 小学校における学習者用デジタル教科書等の ICT を用いた個別学習

犬塚 章夫 (愛知教育大学)

区分:自由研究

対象:小学校

1人一台端末が実現され、学習者用デジタル教科書が無償配布されている今、一斉授業から個別学習へのシフトが求められている。大学の附属小学校において学習者用デジタル教科書等の ICT を用いた個別学習を進めてきた。パフォーマンス発表に向けて意欲的に計画を立てて個別学習に取り組むものの、日本語の英訳に時間が多くさかれていた。学習者用デジタル教科書を活用した個別のミッション型個別学習への移行が示唆される。

④ 小学校外国語科「読むこと」における授業実践―「語のかたまり」を活用して―

田中 真理 (千葉大学大学院生)

区分:自由研究

対象:小学校

小学校外国語科「読むこと」の指導は、教科書の例文の音読や音声に合わせて、指で文字をなぞるなどの活動にとどまり、文部科学省の示す育成すべき三つの資質の一部である思考力を高めるに至らない。本研究では、「読むこと」の「思考力」である「文の意味を理解し、自分のものとして捉える力」を育むため、「読むこと」に直結する文構造の指導の一つ「語のかたまり」を提案する。具体的な授業実践例を示し、研究成果を報告する。

A45 講義室 【小学校英語】

① 小学校英語自宅学習教材の分析

河内山 真理 (関西国際大学)・有本 純 (関西国際大学)

区分:自由研究

対象:小学校

小学校の英語に関し、市販されている自宅での学習用に教科書に準拠したワーク、ガイドについて、実際にどのような内容か、音声面を中心に調べた。音声は、QR コード利用で手軽に音声を聞けるようになっているが、文単位の音声は、速度が遅いためかほぼ全語に強勢が置かれ、英語として不自然な例が多い。またページの下部に発音をカタカナで表記する例が散見されたが、表記法の規則や解説などはなく、誤解を招く可能性がある。

② 小学校英語の授業における教師の口頭訂正フィードバックとその周辺要因の関係―決定木分析によるモデル化―

内野 駿介 (北海道教育大学)

区分:自由研究

対象:小学校

小学5、6年生の授業各1単元分(各8時間扱い)における児童の発話エラー、教師の訂正フィードバック、学習者のアップテイク、教師による発話修正の強化の4者の関係性を決定木分析により検討した。これらの要素の間には普遍的な関係性(例:recast は repair につながりづらい)が認められた一方、単元の進行や児童の学年に応じた関係性の変化(例:単元前半や5年生の授業で reformulation がより用いられやすい)もあることがわかった。

③ 日本の小学校外国語初学者における指導法の比較研究

折橋 晃美 (長野県佐久市立野沢小学校)

区分:自由研究

対象:小学校

小学校における英語指導の在り方について考究した実践と研究である。P(Presentation)―P(Practice)―P(Production)と TBLT(Task-based Language Teaching)を比較検討し、指導法の有効性について実験効果測定の結果と課題に加え、児童の振り返りから示唆されたことをまとめた。

④ 小学校外国語教育に係る人材育成―徳島県小学校教育研究大会会場校の取組例―

上萩 琴美 (徳島文理大学)

区分:事例報告

対象:小学校

2020(令和2)年度に小学校高学年の外国語科が全面実施となり、今年度で5年目を迎える。各校において素晴らしい実践が重ねられる一方で、指導者不足・偏った指導方法等、課題も山積している。本発表は、令和5年度徳島県小学校教育研究会外国語研究大会(名西大会)の会場校として、令和4・5年度の2年間、徳島県石井町藍畑小学校で取り組んだ研究の成果と課題についての実践報告である。

B34 講義室 【指導法】

- ① 話すこと(やりとり)における合意形成スキルの育成—情報交換、取引、合意形成の各段階における気づきの変化—
入江 有希 (鹿児島県鹿児島市立長田中学校)・石原 知英 (鹿児島大学)

区分:自由研究

対象:中学校

本発表では、中学3年生41名を対象として実施した交渉的な対話活動の成果を報告する。実践では、10回の帯活動として、相互の意見をすり合わせる必要が生じるロールプレイ型のタスクを行い、その中で、交渉における情報交換、取引、合意形成の各段階で必要となる表現等を振り返らせた。指導の結果、合意形成の納得感が漸次的に向上していったことや、各段階でどのような気づが生じていったかについて報告する。

- ② Do students watch pre-class videos in a flipped learning environment?

LEIS, Adrian (Tohoku Gakuin University)

区分:自由研究

対象:大学

I investigate whether or not university students watch the required videos before class in a flipped learning environment. Findings revealed 85% of the sample did not diligently watch the pre-class videos, citing reasons such as "forgetting" and "being too busy." Strategies to enhance engagement in flipped classrooms will be discussed.

- ③ Improving Literal Comprehension of Narrative Texts Through Inferential Instruction: Comparing Learner-centered With Teacher-centered Approaches

YANASE, Manabu (Sonoda Women's University)

区分:自由研究

対象:大学

This study aimed at improving narrative comprehension using two types of inferential instruction in learner-centered and teacher-centered ways. The results showed that the learner-centered group outperformed the teacher-centered group in a recall test, indicating that learners' engagement in inferential activities enhances their understanding of the text.

- ④ 創造的活動における反復

山本 昭夫 (学習院高等科)

区分:自由研究

対象:一般

本発表は、外国語学習における創造的活動の重要性を反復という要素に焦点を当てて議論するものである。ことばの運用は、その度ごとに創造的活動であり、創造的活動の中にある反復の要素があるにも関わらず、あまりその創造性や反復性に光が当たらない。外国語学習における創造性と反復性の認識を高めることにより、ことばの運用に結びつく外国語学習に近づくのではないかと思われる。

B35 講義室 【指導法】

- ① 生成 AI による産出モデル文を活用した英作文修正活動の試み

濱田 活仁 (弓削商船高等専門学校)・新美 徳康 (広島大学大学院生)・福光 将仁 (筑波大学大学院生)

区分:事例報告

対象:高等専門学校

本実践では、英作文テストを実施した次時に、指導者が生成 AI による産出モデル文を提示し、高専学生がそれと自身の解答文とを比較分析して修正する活動を試みた。活動中に学生がワークシートに記述した修正する理由や方向性を、複数の観点からカテゴリに分類し、学生たちが自身の英作文をどのように修正しようとしたのかを把握した。カテゴリ分類の結果から、生成 AI のモデル文を活用した学習者の英作文修正行動を多角的に考察する。

- ② 学習者の意識とニーズから探る語用論統合型指導の可能性

シーハン小田 早苗 (お茶の水女子大学)

区分:自由研究

対象:大学

コミュニケーションを水面下で支える語用論的要素については、教師がその重要性を認識し、文法指導と統合させながら明示的に指導することが望ましい。本研究では、大学生学習者への質問紙調査を通し学習者の意識やニーズについて解明し、語用論統合型指導促進のためのプロセスおよび教師への効果的な働きかけについて考察する。語用論に関連した社会文化的分析を組み入れることにより、言語教育の枠を超えた学際的探究を目指す。

③ 話し合い学習法(LTD)が及ぼす英語リーディングへの学習意識の変容

和田 珠実 (中部大学)・鈴木 寿摩 (日本赤十字豊田看護大学)

区分:自由研究

対象:大学

本研究の目的は、「話し合い学習法」(Learning Through Discussion、以下 LTD)を大学3年次のリーディング授業に導入し、その効果が及ぼす学習意識の変容の調査考察である。先行研究では大学初年次生の主体的な学びへの LTD の有用性が実証されている。しかし、大学3年次生の LTD のふりかえりを分析したところ、初年次生と同様の結果はみられなかった。その諸要因が LTD の導入学年の違いによるものなのか検討した。その結果と明らかになった課題を報告する。

④ 英文の内容理解を深めるポストリーディング活動—RetellingとMediationの比較—

林 さなえ (兵庫県明石市立野々池中学校)・濱田 彰 (神戸市外国語大学)

区分:自由研究

対象:高等学校

本実践では、物語文読解後の内容理解を深める活動として、リテリングとMediation活動を行い、その効果を比較した。高校1年生を対象に、リテリングでは話し手が読んで理解した内容を一方的に聞き手に伝え、Mediation活動では話し手と聞き手が内容に関するやり取りを行った。筆記再生テストと4種類の推論質問の回答を比較した結果、Mediation活動の方が生徒たちの字義的な理解及び推論的な深い内容理解が促されていることがわかった。

B36 講義室 【指導法】

① 自己採点を取り入れたスペリング学習がテスト得点と自信度に与える影響の検証

高波 幸代 (群馬大学)

区分:自由研究

対象:大学

本研究では、自己採点を取り入れたスペリング学習が日本人大学生のスペリングテスト得点と解答への自信度に及ぼす影響について調査した。学習前後に同一のスペリングテストを実施し得点の伸びを比較した。学習の際には単語の覚えやすさ、学習後には自己採点後に抱いた印象についても回答させた。発表では自己採点による学習効果や認識の変化、学習後も習得が難しいと想定される項目の特徴などについて詳細を報告する。

② 高専英語教育に必要な英語コロケーションリストの作成—神戸高専電子工学科を例に—

石井 達也 (高知大学)・平野 洋平 (神戸市立工業高等専門学校)・上垣 宗明 (神戸市立工業高等専門学校)・

Pileggi Mark Andrew (神戸市立工業高等専門学校)

区分:自由研究

対象:高等専門学校

本研究の目的は、高等専門学校の英語教育に有用な英語コロケーションリストを作成する方法論を共有することである。神戸高専電気工学科を対象に、本科生の卒業研究の日本語データをコーパス化し、特徴語分析を行うことで、専門日本語を抽出した。次に「専門日本語+を+動詞」のパターンを抽出し、英語化することで、「Verb+Object」のリストを作成した。同リストを低学年の英語教育に応用する可能性についても論じる。

③ 中学校英語科における指導順序の考察—新出文法から指導するべきか・本文から指導するべきか—

久保 孝彰 (香川県高松市立龍雲中学校)

区分:自由研究

対象:中学校

中学校の英語科では、従来英語の新出文法を学習してから本文でその文法を確認することが多かった。しかし、実際の言語習得では、新出文法を文脈から理解し、後でその文法を学んでいる。近年の教科書では、本文から学習するものもある。中学校英語科では、新出文法から学ぶべきなのか、それとも本文から学び、後でその中にある文法を学ぶべきなのか、仮定法の指導を通して比較、考察した。

④ 高校英語授業におけるプレゼンテーション指導の工夫—活発な質疑応答をもたらす課題設定の一方法—

千菊 基司 (鳴門教育大学大学院)・香田 夏美 (福岡県立福岡高等学校)

区分:自由研究

対象:高等学校

高校英語授業において、プレゼンテーションは行うべき活動に含まれるが、質疑応答の場面では、一部生徒しか参加できないことがしばしば課題となる。本発表は、この克服のための指導方法の提案を目的とした実践に基づくものである。キュービングの発想を意識して、話し手が原稿を用意し、聞き手に質問させる単元指導を通じ、指導の前後の発表原稿の内容や英文の質が向上し、質問ができたという回答した生徒の割合が増加した。

8月24日(土)

① 9:30-10:00

② 10:10-10:40

③ 10:50-11:20

④ 11:30-12:00

B37 講義室 【指導法】

① 高等学校総合学科における話すこと[やり取り]における感情面・認知面・方略面の指導と支援—学びのユニバーサルデザイン (Universal Design for Learning, UDL) の枠組みを用いて—

武田 千絵 (広島文教大学)

区分:自由研究

対象:高等学校

UDL の枠組みを用いて、多様な学力や学習気質を持つ生徒を対象にした話すこと[やり取り]における指導・支援を行った。感情、認知、方略の側面から学習を統合的に捉えて、情緒面を考慮しながらストラテジーを段階的に導入した。その結果、一定程度の不安の解消がなされたが、新たな不安も見られた。先行研究を改良した独自のストラテジー指導によって会話の継続は促進されたが、認知活動の活性化においては課題が残った。

② やりとりを軸とした公立中学校における長期的実践研究—場面・目的に応じて話す力の育成を目指した実践の成果と生徒の変容—

島崎 圭介 (堺市教育委員会)

区分:自由研究

対象:中学校

公立中学校における3年間の実践研究を通して、「考えて話す」ことを軸にした授業が、中学生の総合的な英語力向上に与える効果を報告する。対象は中学生(N=81)で、3年間の各調査テストの結果と生徒自身の省察から分析した。全国学力・学習状況調査では、全国の平均正答率と比べて、筆記テストにおいて12%以上、話すこと調査では14%以上高い結果となった。4技能5領域の力を向上させた実践と生徒の変容を紹介する。

③ タスクのタイプが L1 を使った発話練習の効果に及ぼす影響

伊達 正起 (福井大学)

区分:自由研究

対象:大学

大学生に、日本語による発話後に同じタスクを英語で発話する練習を与えた。G1 は絵描写タスク、G2 はトピックタスクを練習時に使い、タスクのタイプが練習効果に及ぼす影響を調査した。事前・事後テストでは、同じ絵描写タスクとトピックタスクを与えた。流暢さに関して分析した結果、練習とテストで使用した発話タスクのタイプが異なることによる影響が出る場合と、両者が異なっても影響が出ない場合があることがわかった。

④ CLIL・CELTA・パラメンタリーディベートの効果的な融合に向けて—発音指導の観点から—

和泉 太輔 (徳島県立城内中等教育学校)

区分:自由研究

対象:高等学校

本研究は、CELTA(英語を母国語としない人に英語を教えるための英語教授法資格)の教授法、CLIL(内容言語統合型学習)、Parliamentary debate task の3つの要素の頭文字を取り、『CCP 型授業』と命名した授業実践を通して調査研究したものである。教科書の内容理解と4技能5領域の総合的な向上をバランスよく図りながら、特に生徒の音声面(発音)の発達に焦点を当て、指導の成果と課題について発表したい。

8月24日(土)

ポスター発表コアタイム 11:00-12:00

A棟 1F 学生ホール 【ポスター発表】

① 「文法項目一覧表」の展開—「改訂版文法項目一覧表」—

高橋 昌由 (大阪成蹊大学)・岡本 清美 (大阪大学)

区分:自由研究

対象:中学校

中学英語の表現の類例を提示する LOGIC システムの中核である「文法項目一覧表」は、学習指導要領に含まれる「文、文構造及び文法事項」を基にして、22 の文法区分とその下位項目の477 の文法項目から構成されており、授業で利活用される「文法」の特定に使用できる。本発表では、学習指導要領の「言語の働きに関する事項」を参照して「文法項目一覧表」を拡充した「改訂版文法項目一覧表」を提案する。

② 大学生の英語学習に対する意識と学習意欲の関係

早淵 はるか (九州産業大学)

区分:自由研究

対象:大学

本研究は、大学生の英語学習に対する意識と学習意欲の関係を明らかにすることを目的とした。本研究は、英語学習に対する率直な意見を知るために、大学生を対象に、4つの質問項目を自由記述形式で回答させた。結果として学生の学習意欲に影響を与えているのは長文読解と単語であり、理想自己として英語が話せるようになり海外の人とコミュニケーションを取りたいと考えることは学習意欲とは関係のないことがわかった。

③ 地方公立中学校における中大連携多読活動とその心理的効果

金子 恵美子 (会津大学)・中島 誠太郎 (福島県会津若松市立第五中学校)

区分:事例報告

対象:中学校

福島県会津若松市は、全国学力・学習状況調査における英語正答率が、例年全国平均を大きく下回る(R5:会津若松 39%、全国 46.1%)。中学校での「読む」活動の活性化を目指し、市教育委員会と会津大学の協力の下、公立中学校で多読活動(授業 4 時間 + 隙間時間)を行った。本事例発表では、英語学習意欲が高いとは言えない地域で多読活動を実施する工夫に加え、アンケート結果に基づき、中学生が受けた多読の心理的効果を報告する。

④ 生成 AI による学習者用補助教材の有用性に関する一考察

藤原 隆史 (松本大学)

区分:自由研究

対象:一般

生成 AI の発展が目覚ましい昨今の状況において、ChatGPT をはじめとする生成 AI の教育への応用・活用は避けて通れない課題である。本研究では、生成 AI を学習の補助教材作成ツールとして用いる際、その生成された教材がどの程度の信頼性を持っているか、CEFR-J におけるレベルの妥当性という観点を中心に ChatGPT が生成した英文を検証した結果について報告する。その上で、教育的示唆を提示するとともに、生成 AI の英語教育への活用について議論する。

⑤ Effects of Integrating Educational Review Games into Non-English Majors' English Classes

YAMASAKI, Aya (Kochi University of Technology)

区分:自由研究

対象:大学

According to Dörnyei and Csizér (1998), creating a pleasant, relaxed atmosphere in the classroom is crucial for motivating students. In this study, educational games such as board games, card games, and online game-based learning are integrated into the classroom to examine how these activities affect students' motivation. The presenter will discuss the survey results conducted in class and review the study to explore possible motivational teaching methods.

⑥ 特定の文構造(後置修飾)の特徴に慣れる練習の提案

奥村 耕一 (情報経営イノベーション専門職大学)

区分:事例報告

対象:中学校

本報告では、5種類のゲームアプリケーションの開発を行い、日本語の文構造と大きく異なる英語の後置修飾を伴う文構造に慣れるための練習を提案する。特にタブレット端末やスマートフォンでは、表示される単語やフレーズ(前置詞・名詞句)をタップして、作成された名詞句の意味に応じてゲームが進むことになる。そこで学習者は意図した意味の通り入力できたかどうか問われ、名詞句内の語順に意識が向かうようになる。

⑦ CEFR-J ベースの英文速読教材における語彙・文法・語法に関する研究

岡裏 佳幸 (福岡工業大学)

区分:自由研究

対象:一般

本研究では、CEFR-J ベースの英文速読教材と CEFR-J 開発チーム作成のサンプル問題とを題材に、語彙・文法・語法に関する比較分析を行う。まず、サンプル問題との比較によって、英文速読教材に使用されている語彙が適切なレベルであるか否かを考察する。次に、CEFR-J Grammar Profile を活用しながら、使用されている文法項目のレベルを検証する。最後に、語法についても同様に比較検討を行う。